

ら非常に多くのことを学ぶことができた。

6. 全体的な感想：大学と実習協力校との一層の連携

教育実習生は教育実習を通して貴重な体験ができたことを深く感謝しており、大学での今後の学びにいかしていきたいと記述している。指導教員にとって教育実習生の指導は時間的にも精神的にも大きな負担になっていると推察されるが、指導教員から「自分自身の児童生徒に対する指導を省察する機会としてとらえている。」という意見があり、大変有難く思う。このような指導教員の気持ちに応えるために、教育実習生は教育実習に真剣に取り組むこと、子どもへの影響を十分に考えて誠実で意欲的な態度をもつことが大切であろう。教育実習生が大学で学んだ基礎的知識や最新の知見を活用し、授業づくりに挑戦する機会として主体的に実習できるよう、大学と実習協力校とが今後一層連携を取り合い、教育実習生を共に育てていきたいと思う。

本調査を通して、指導教員は実習生に主体的な学びの姿勢を期待しているのに対して、教育実習生は目の前にある課題や指示されたことをこなすことで精一杯であり、余裕がない状況がみられた。しかし、今回の学生の調査時期が、前期実習という初回の経験直後であったこと、指導教員への調査は約8ヶ月後と異なっていたことなど調査方法も結果に影響を与えていると推察されるため、今後研究方法の改善が必要と思われる。

引用文献

- 1) 島海順子・古家貴雄・谷口明子・角田修・長谷部美佐子・山本英寿・石井敬・手塚雅仁・青木洋子・澤登義洋・望月之美・泉晋一 (2010) 山梨大学教育人間科学部と附属4校園との連携に関する研究Ⅰ. 山梨大学教育人間科学部紀要, 第11巻, pp357-365.

